

岩下貞融と国語研究

『堤中納言物語』の注釈を中心として

清水 登

一 岩下貞融について

岩下貞融については、土岐武治氏^{注一}、滝沢貞夫氏^{注二}、小林一郎氏^{注三}による論考がある。岩下貞融に関する記録としては、『信濃人物誌』(昭和三十七年)に次のように記されている。

岩下桜園 一八〇一—一八六七

享和元年長野の善光寺大門町の素封家葛屋^{ウツヤ}こと、岩下平助貞諱^{ウツヤ}の長男に生れ、通称多門・貞融・桜園・官山・太古堂と称した。父貞諱は草露庵草司と云う井上土郎^{ウツヤ}の俳人で、「無物斎遺稿」「桐屋集」などの著書があり、墨竹を能くするを以て知られていたから、桜園も幼時より文芸に心を委ね、十九歳のとき名古屋に至り、善光寺の出身で名古屋の藩儒となった、塚田大峯に師事し、また京都に出て頼山陽に詩文を、江戸の清水浜臣に国学を学び、伴信友・黒川春村・寺門静軒と交わり和漢の学を兼ねた。また郷に帰り善光寺の大勧進に任せ、沐浴して心身を潔めては「般若心経」を筆写して知人に頒ち、慶応三年九月十日六十七歳で亡くなった。「芋井三宝記」「善光寺史略」「桜園雨後」「天の八衢」「繋かぬ舟」等の著があるが、弘化四年の長野の大地震のとき、その著述の大半を夫^{ウツヤ}つたと伝えられてい

る。(長野市史)

貞融の著書については、『天の八衢』巻末の「桜園著述目録」に次のように掲げられている。

天の御中一卷・天八衢一卷・六運要略・転音例二卷・芋井三宝記二十四卷・善光寺史略二卷・善光寺别当伝略二卷・孝経集伝四卷・中庸微頭一卷・枕冊子夏夜抄・桜園集十卷・桜園外集六卷・桜園詩文・二十四番唱和詩一卷・桜園詩話三卷・伊呂波小伝一卷・ひとりごと一卷・歌体弁二卷・菅樵暇筆一卷・堤中納言物語標注

その他「校本目録」に、

住吉物語二卷・桜園叢書十集

とある。

二 岩下貞融と学的環境

貞融は『信濃人物誌』の紹介する記事によると、多くの学者と積極的に学問的交渉をもったとされている。その実態について記録された文献をみてみよう。

*T380-8525 長野市三輪八一四九七 長野県短期大学

若狭国小浜妙女寺主義門が新井守村へ送った天保十三年三月十日付の書簡に、

さて又得御意候。貴地よりハ信州善光寺へ御便易有哉。かの山内役人ニ岩下平助貞融と申仁有之、歌はすぐれても聞えねと文章ハよほどよく調へ申学者と被在候。未面候へ供、以文通此間も右仁文章七章作不及加筆しかへし申候。御便もやう宜く候へハ御文談の御友と御成り可然と存候。

とあり、貞融が義門から歌文の指導を受けていたことがうかがえる。義門の評によれば、殊に長文に堪能であつたようである。右書簡にひきつづき行間へ細筆で、

貞融たんさく一葉上置候。是をよすがに文章みせよと御申遣被成候へハ御おくり申らん。牡丹の文などはいとよかりき。此書付被遣ても苦からず。

と記されており、義門は『活語餘論』二之巻最後尾の一条「ぼうたんの花　とう蘇白散　附牡丹辞」の末に、

牡丹辞とて信濃より善光寺につかうまつれる貞融名字岩下平助と云人のミせにおこせたる文のりからりから此餘論こゝまでかき改たるにあへせてこゝに来けるを披きみるにをかしさいといたうおほえけるまゝに

とことわり書きをしたうえで、貞融の「牡丹の文(辞)」を全文掲載している。この「牡丹の文(辞)」は、貞融の『繋かぬ舟』(安政五年四月十二日刊・中之巻二十二オ)にも掲載されている。本文は大略一致しているが、数カ所に異同が認められる。

さらに『繋かぬ舟』(下巻・三十六ウ)には「義門法師をかなしふる」と題する一文が掲載されていて、義門が学問の人脈の面できかに重要な位置を占めていたかがうかがえるのである。

その他、黒川春村と貞融との学問的交渉を示す記録もある。そ

れは、春村の考證隨筆である『碩風漫筆』(続日本隨筆大成7)の「かつみ考附花がつみの舟」に見ることが出来る。

彼の著書『天の八衢』について紹介することにしよう。本書はその書名が示すとおり、本居春庭の『詞の八衢』を意識したものである。内容は神道によって森羅万象を説明しようとするものであり、それが貞融の当面の関心事でもあつたのであろう。また同書の「言霊の条」(十七ウ―二十オ)で述べられている事柄は、当代における国語研究(とくに活用研究)に触れている点で貞融の国語に対する認識の程度についてうかがうことができ、注目させられる。該当する部分を次に掲げることとしよう。

おほよそ古の言は四種なり。その一には手爾乎波、人の心の声にあらはるゝは手爾乎波のはじめ也。二には物名、其声やがて万の物事に名をおほせてしわかつかは、物名のはじめ也。

物名とは所謂三には形状、四には作用、此二種は手爾乎波をもて、物名をいふは、
体言をいふは、
名詞をいふは、
動詞をいふは、物名を貫きつらねたるがうへに、おのづから二かたにわかれるは、形状作用のはじめ也。形状作用は、
用言をいふは、
動詞をいふは、
名詞をいふは、此

もとは手爾乎波と物名との二にて此手爾乎波なん詞の玉の緒なりける。此四種は言語四種論にもとづき、
若し若し義門の説にしたがふとも、
ミタマ、トクニ、コト、カタ、
三種の本末、
結、
玉、
形、
状、
作、
用、
の、
種、
々、
の、
活、
用、
同、
八、
衢、
詞、
集、
路、
山、
口、
采、貞融は当代の国語研究の成果についてかなりの程度理解していたものと思われる。波線部は鈴木艮の『言語四種論』注四において次のように記述されており、その理解の正確さが看取されるのである。

人ノ心ノ動ケルサマ音聲ニアラハルムハ、テニヲハノハジメ也。サレバテニヲハム詞ノ骨ノ髓精ノ神ニシテ、言語ノ大宗也。カクテ其音聲ヲ以テ万ノ物事ニ名目ヲツケテシルシ別ツ。コレ体ノ詞ノハジメナリ。体ノ詞ヲテニヲハラハテ以テ貫キ連ネハタ

る。

ラカシ用ル時、テニヲハト体ノ詞ト一ツニ合テ、二種ノ詞トナ
ル・コレ形状ノ詞ト作用ノ詞トノハジメナリ。

三 岩下貞融と『堤中納言物語』の注釈

県立長野図書館には『堤中納言物語 全』（請求番号 N930/46）
と題する一書が所蔵されている。本書については、藤田徳太郎氏

によってその存在が世に知られることとなった。^{注五}

また本書は次のような土岐武治氏の指摘により、「桜園著述目
録」所収の『堤中納言物語標注』に比定されるところとなった。^{注六}

なほ貞融著「天八衢」の附録中に彼の著述の一つとして、
「堤中納言物語標注」の名が見えるが、それは此の貞融自筆本
を指してゐるのである。

本書の奥書は朱色、青色、墨色の三色によって次のように記さ
れている。

(朱) 文化三丙寅夏五月令書生某騰寫了

即日校一過聊註所見

濱臣

とした。

同七年冬十二月書舖萬笈堂有上木
之企訪來請訂正因再就考正焉

(青) 文政六癸未仲春以泊泊翁所藏本寫之
即日一校了

光なか

(墨) 天保四年歲次癸巳仲夏聊加僻案畢

貞みち

土岐武治氏は朱書きの識語と無窮会図書館蔵の清水浜臣自筆本
との識語とが全く符号することから、浜臣自筆本を伊藤光中が文
政六年に書写し、それを貞融が借覽して書写したものと推測され
ている。^{注七}

本書は本作品に対する三者の注釈が一覽できる貴重な資料とも
なっている。

それでは、貞融によって本作品に書き入れられた、欄外への頭
注ならびに本文への書き込みの全例を次に示すことにしよう。た
だし必要に応じ朱書きの浜臣の書き込みについても掲載すること
とし、朱書きの書き込みであることを示すために波線で示すこと
とした。

岩下貞融による本文への書き込み

欄外部分への書き込み(頭注)	該当する本文ならびに本文部分への書き込み	
カヘル	このありつるものゝ返よびて	十一ウ
①返	日ざしあがるほどにおき給ひてよべの所にふみかき給ふ	十二ウ
②少将の山荘にかへり給ひてのよべの所にやらんとてふみ書給ふなり	わか身にかつはよはりしかな も歎	十三オ
④	……ことよくかたらぬ ふ原歎	十四オ
⑤	ひはものゝうしろへとりやりたれば	

欄外部分への書き込み(頭注)	該当する本文・本文部分への書き込み	
⑥	燈火 などいふほどに ^突 居給て	十四ウ
⑦ つい給はむとすそとて	そゝのかせばさらばついたまはむとすそとて	十五オ
⑧ 障子に穴をあくるをいふ	ものはかなきさうじのかみのあなたへいでゝ	十五ウ
⑨ 融按古本はこゝともものこもし一字衍歟 されと 筥籠どもと見ても聞ゆべき歟	まを見むとてさま／＼なるこはこと あしたゆふべにあいし給人おちわびて まを見むとてさま／＼なるこはこと はこゝとも古	十七ウ
⑩	愛字音	十九オ
⑪ 誤字あるへし 不審	かひこのまだはねつかぬにいだしてけにになりぬればいともそてにてあたになりぬ るをやとの給にいひかへすべうをあらすあさまし そへて	二十オ
⑫ 融按古本そへてのもし衍歟 ありてもわるき にはあらず	もやのすだれをすこしまきあげてきてういでたてゝかくさかしくいひだし給なり けり	二十ウ
⑬ いかなる幸ひ人かの意	この御あそびものにいかなる人てふめづるひめ君につかうまつらんとて	二十ウ
⑭	いかでわれとかむかたな〇いてしが成はかむしなからみるわざはせじといへば もの歟 衍歟かは歟	二十ウ
⑮	てふといふひとありなむやは もの歟 衍歟又み歟	二十一オ
⑯ 融按おほはなきの字を誤まる歟 伊藤氏云うたひのゝしらせなとあるをもて考ふ 才空	そのほとをたづねし 給ぞかし むしどもをとりあつめて奉るかはむしはけなとはをかしげなれどおほえねばさう ぐしとて	二十一オ
⑰	これは大吠などの意歟	二十一ウ
⑱ 生前親にて前生の親にてあらんの意	いなごまろあまびこなんなどつけてめしつかひ給ける 君はいとのどかにてなもあみだ佛／＼とてさうぜんのおやならんなさわざそとうち わな／＼かしかほ／＼かやうになまめかしきうちしも	二十一ウ
⑳ 顔外様にかたしかならず	いなごまろあまびこなんなどつけてめしつかひ給ける 君はいとのどかにてなもあみだ佛／＼とてさうぜんのおやならんなさわざそとうち わな／＼かしかほ／＼かやうになまめかしきうちしも	二十一ウ
㉑ 顔外様にかたしかならず	いなごまろあまびこなんなどつけてめしつかひ給ける 君はいとのどかにてなもあみだ佛／＼とてさうぜんのおやならんなさわざそとうち わな／＼かしかほ／＼かやうになまめかしきうちしも	二十二ウ

②① 融按立ところ云々こは中昔くちなはにあへる時のましなひにてやあらん歎 きはめて誤字あるへし

②②

ちかくひきよせ給もさすがにおそろしくおほえ給ければたちどころめとてをのことくせみこゑにのたまふこゑのいみじうをかしければ

る歎 災難

二十二ウ

②③ かみはきはきはきある
②④ 姫君達の中にいつれとなさふらふとみて意

あたま見ゆる中にいづくのかあらんうす色きたるかみはきはきはきあるかしらつききやうたいなにもいとをかしけなるを
いかになりにけんうせ給ひにし式部卿のみやの姫君の中になんさふらひける宮などよくかくれ給にしかば心ほそく思ひなげきつゝしもわたりに
いかにせんとながめ給ほどにうち御あそひはしまるをたゞいまゝあらせ給へとてくら人の少将まゐり給へり

二十七ウ

②⑤ 融云蔵人をくら人方人をかた人とかけりこはかなぎせんにはかたうとくらうととかくかたたしかるへし

みぎにはふえうにこそは
はづかしげにてなどゝよ

不要

三十オ

②⑦

何事そよの意歎

三十一オ

②⑧ くつほる 假字拾要

つちさへわれててる月にも袖ほすよなくおほしくつほる
ときくははしつかたにてもすゝませたまへかしあまりこもれいたるもとてれいのわりなきことこそえもいひしらね御けしきつねよりもいとほしうこそ

三十四ウ

③⑩

か歎

三十五オ

③⑪ 後拾遺

野にも山にもとゝこたせ給ふこそ
いとしのびてまゐりきたる人ぞ〇とより給へといへどあすの事おもひ侍るにいまよりいとまなくてそとき侍るぞときへづりかけていぬべく見ゆめり
かうしのはさまなどにてみせ給へといへばひとにかたり給はとほゝもこそたまへとおづればものぐるほしまるはさらにもいはぬ人ぞよ
いかなるにかひとものふちとの給へばよろづもおほえてさらば
いと心ほそき古里にながめすごし給しかずはかくしめて御めのとだつ人もなし
ときはなる軒のしのぶをしらすしてかれゆくあきのけしきと

三十五オ

③⑫ ひとにかたり給はとほはとほもこそ云々
③⑬ いかなるにかひとものふちとの給へは

三十七ウ

③⑭ はかしくしてはなしくしきの脱歎 本のまゝ
にても大かたは聞ゆ

三十八オ

③⑮ 伊藤氏云御かけは御かほの誤なるへし

四十二ウ

欄外部分への書き込み(頭注)	該当する本文・本文部分への書き込み	
<p>③⑥ 融按中将君中のきみの誤なるべし 外にも此誤の例あり</p> <p>③⑦ チギリ契</p> <p>③⑧ いかどはせんにてみ給ふはいかどはせんの心にて見てゐさせ給ふなり</p>	<p>か敷 やおもふとあきそへてみせ奉り給へばいとほづかしうて御かけ引れ給へるさまいとらうたくこめきたり</p> <p>の敷 かやうにてあかしくらし給に中将きみの御めのとたりし人はうせにしか いかに見給らんとはづかしう契くちをしうおほさるれど</p> <p>いまはいふかひなき事なればいかどはせんにてみ給これもおろかならずおほさるれどあぜちの大納言きく給はんとおとどきふにいさめ給へば</p> <p>急 光中按は敷 将敷 この右大臣殿の少将にて 右大臣のきたのかたの御せうとにもし給へば</p> <p>心とがめ給はずよとにもにあくかれ給しのび△御事をも大將</p> <p>少將 とのおほするなど思はせ給へり</p> <p>父ノ右大將殿敷 かぎりなくなつかしうなめやかなる御けはひはいとよくかよひ給へれば</p> <p>衍敷 いまの一人の少將の君も母うへの御かぜよろしきさまに見え給へば</p> <p>れいのきよすへまいりて御車といふを申つたふる人もひところはおはしぬれば</p> <p>も敷 さりとて又もとをおろかにはあらぬ御思ひどものめづらしきにもおとらずいつかたも かぎりなかりけるなか／＼ふかきしもくるしかりけれ</p> <p>はなだの女郎</p>	<p>四十四オ</p> <p>四十四オ</p> <p>四十五オ</p> <p>四十五オ</p> <p>四十五オ</p> <p>四十七オ</p> <p>四十七オ</p> <p>四十七オ</p> <p>四十八ウ</p>
<p>④① なめやか</p> <p>④②</p> <p>④③ きよす不詳 もしは清砂にて今の玄関前の砂利のやうなるをいへる敷</p> <p>④④</p> <p>④⑤ 融云こゝにはなたの女郎とあるかたよろしくて目録に縹女郎とあるかたかへりてわるくおぼゆ是はずきものゝやんことなき所にて物いひけさうせし縹女郎をさとにまかりたりときよてたつねてあまたの女とものおのか主の君を木草にたとへいふを見ればかつ／＼おのかしりたる人と</p>		

もなればふと歌なとよみ出たれば女ともよそれ
とさとりてものするほとに晝になれば出ぬ也心
あてにせし縹女郎はそこにはあらぬ也けり
清水氏曰縹女郎不審もし花々女郎の誤歟 さま
くの草花にたとへたることあればなりといへ
り

はな／＼の女郎とある者をはなたと見あやまち
てつひに縹女郎とかけることうつなし
④⑥ 大王宮歟

④⑦ 融云父おとよの下脱文あるべし もしは父大臣
つねに桔梗ときこえてぎやうをよませつゝとあ
りしか 善本をまつべし

④⑧

④⑨ 融按あやまりたることは云々の下脱文あるへし

④⑩ 融按帥ノ宮の御上は花名のさまにやにさせ給
へると花名のありしを脱落せしなるべし 朱書
のの字ひがごとなり

④⑪

④⑫ 融云古本ぬれば三字なきは非なり

さむはれのきはの山すげは寒枯の極の山菅歟

ぎほうしはだいわうのみやにもなどか三宮しをんのはなやかなれば
くわうこぐうの御さまにももがな

皇 后 宮

④ 四の宮中君はちゝおとよつねにきゝやうをよませつゝいのりかちなめればそれにも
なとかにさせ給はさらん

七の君脱歟

六の君かきほのなでしこはそつ殿と聞えまし○かるかやのなまめかしきさまにこそ
こき殿はおはしきせ

と脱歟 九の宮のゝ給へば歟

れいけい殿は花すゝきと見え給御さまぞかし○

といへば十君

シフ

御方しげいさの御おとよの三の君あやまりたることはなけれど大ざうにぞにさせ給
へる

の歟 花名脱歟

にしの御かたそつ宮の御うへは○さまにやにさせ給へる

句

わたらせ給はぎめればよ○つみをはなれむとてかゝるさまにてひさしくこそなりに

罪

けれとの給へば

ナン古

をかしきはみなとられたてまつりぬればさむはれのきはのやますげにきこえんまこ
とやまろが見たてまつるそつ宮のうへをばばせをばと聞えむよめの君中つかさのみ

四十九ウ

五十ウ

五十ウ

五十ウ

五十一オ

五十一オ

五十一オ

五十一ウ

欄外部分への書き込み(頭注)	該当する本文・本文部分への書き込み	
<p>伊藤氏云さむかれのきはの読もいかもしはさもあれの意にてきはれといふを音便にてさんはれといへる歟 猶考へし のきは、軒端也 融云師宮上をは芭蕉葉ときこえむこの詞小命婦君の詞歟 又は北方の詞歟 いかにも定めかたし 又云此師宮上と西御方の師宮の御上とは別人歟</p>	<p>やのうへをばまねくをばなと聞えむなどきこえおはさうするほどに日くれぬれば あはれしんくはめでたかりし事ぞかし 世中のうきをしらぬと思ひしにこはひにもはなげかしきかなみやうぶの君ははちすのわたりもこの御かたちもこの御かたなどいづれまさりておもひきこえ侍らんにく女院 きえだおはさじかし</p>	<p>五十一ウ 五十一ウ</p>
<p>⑤4 又云しんく不詳 ⑤5 融按にはひは屋火の心歟 されとおたやかならぬところあり 融云この御方誰をさすにか</p>	<p>みな人くもわらふ○まろがきくの御かたこそともかくも人にいはれ給はね 植しよりしげりましにしきくの花人におとらでさきぬべきかな とよめれば九の君うらやましくもおぼすなるかな <small>八古</small> <small>なり歟</small> このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十二オ 五十二オ</p>
<p>⑤6 融按八の君三字脱せしなるへし 融云古本八の君のかたわろし</p>	<p>このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十三ウ 五十三ウ</p>
<p>⑤7</p>	<p>このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十四ウ 五十四ウ</p>
<p>⑤8</p>	<p>このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十五オ 五十五オ</p>
<p>⑤9 たれそやる 不審</p>	<p>このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十五ウ 五十五ウ</p>
<p>⑥0 引歟なとあるへく</p>	<p>このすきものたよりけりあなかまとて <small>て歟</small> かのをみなべしの御かたといひし人は声ばかりをきしころさしふかく思しひとなり きくの御人はいひなどはせしかどことにまほにあらでたれぞやるをとばかりほのかにいひて をみなべしのいみしくをかしくほのかなりしすゑぞいまいかでたよそひにてかたはらんと思に心にく今一たびゆかし <small>香歟</small> きかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかないたらぬさとへなどは</p>	<p>五十五ウ 五十五ウ</p>

⑥1 原本もしの下朱にてし歟となるよし也

そく古光中按くしを倒誤歟
かの女たちはこゝにはしば／＼おほしくてかく一人づゝまゐりつゝ心／＼にまかせ
てあいてかなをかしく事いひてたるこそ

不詳 言出

し脱歟

をかしけれそれもこのわたりいとちかくぞあなるもし〇り給へる人あらばその人とか
きつけ給べし

いまの人のおやなどはおしたちていふやうめなどもなき人の

女は初めをさす歟

おやさだにあらせ給へ

然

う歟

今なんくやしければいまもえかきたゆまじ〇なんかしこにつちをしすべきをこゝに

わたせとなんいふをいかゞおぼす
としごろゆくかたもなしとみる／＼かくいふよと心うしとおもへどつれなくいらふ

さるべきことにこそはやわたし給へいづちも／＼いなんいまゝでかくてつれなくうき

世をしらぬけしきこそといふ

み歟

いかむさまをだにはむとおもひて

見

て古

くるまはうしたかひ〇うまなん待るといへばたゞちかき所なればくるまは所せしさ

らばそのうまにても夜のふけぬさきにといそげば

かしらつきいみしくをかしげなるをあはれとおもひておくりにわれもまゐらむとい

ふたゞこゝもとなる所なればあへなん

壙

こまはたゞ今かへし奉らんそのほどはこゝにおはせ見ぐるしき所なれば人に見すへき

所にも待すといへばさもあらんと思ひて

女ははやうまゐてまゐりね

早クノ意率

⑥2

⑥3

⑥4 つちをし云々 不詳

⑥5 竹取物語

⑥6 原本にみとあるよし也
はは筆者の誤

⑥7 くるまはうしなひての誤歟
牛連てにても大かたは聞ゆ

⑥8 未摘花

⑥9

⑥9

⑥9

⑥9

六十才

五十九ウ

五十九才

五十八ウ

五十八才

五十七ウ

五十七才

五十七才

五十六才

欄外部分への書き込み(頭注)	該当する本文・本文部分への書き込み	
<p>⑦⑩ をもしあれはおたやかなれと本にても大かた聞ゆ</p>	<p>みちすからをやみなくなんなかせ給つるとあたは御さまをと いへばをとこあけぬさきにとてこのわらは○ともにていとよくいきつきぬげにいとち ひさくあはれたるいへなり またなく思ていへにわたさんとせし人にはこゝなるひとのわづらひければをりあし かるべしあやしかるべしこのほどをすごしてむかへたてまつらんといひやりて 此をとこいとひきよりなりける心にてあからさまにとてその人のもとにひるまにい りくるを見て 女はそこにてしばしないうり給ひそといへとてせひにもしらず それを女のしにしけるそうの聞て 是非歟</p>	<p>六十一オ 六十二オ 六十二オ 六十二オ 六十三ウ</p>
<p>⑦⑪ あやしかるへし七字衍歟 ありても聞ゆ</p>	<p>文詞 もろこししらきにすむ人さてはとこよのくにゝある人わがくにはやまかつしなつく の恋まるなどやかゝる詞は聞ゆべきそれたにもすだれあみのおきなはかしだいじのむ すめになたち 名立 このくに猶ちかしもろこしのごだいさんしらきのみねに 又歟</p>	<p>六十三ウ</p>
<p>⑦⑫ やまがつしなつくの恋まる すたれあみの翁</p>	<p>ツチムカ 融按猶地近し歟ともおもへと猶げぢかしの誤な るべき歟 いつちまれともおほく侍 誤字あるへし</p>	<p>六十四ウ</p>
<p>⑦⑬ またはのほもし衍歟 衍と見はおたやかなれと ありても大かた聞ゆ</p>	<p>最料 あをにてもまたは十よけんのひはだや一らうしんでんおほい殿くるまやどりもえう侍 れどとほき程は所せかるべしたとこしにゆひつけてまかるばかりのれうにやかた一た 屋形歟</p>	<p>六十三ウ</p>

本書における貞融の書き入れについては、注釈史的にも注目すべき点が多く、土岐武治氏によって分析されている。氏によって分析の対象となったのは次の四箇所である。該当する箇所についての氏の説を紹介しよう。

I 「虫めづる姫君」の「みな君たちもあさましうさいなんあるわたりにこよなくもあるかなとおもひて」の「さいなん」の本文に「災難」という傍注を施していることについては、江戸時代の諸家中、貞融によって初めてこの本文に解釈が与えられ、明治から現代までの諸注釈書に影響を与えている点で注目すべき解釈であることを認めつつも、京都大学付属図書館蔵伴友校本に伝える山岡明阿本による褐色の該当校合異文が、「さへなん」と表記されていることに注目し、「さへ」は副助詞、「なん」は係助詞として解釈すべきものとされ、貞融の注釈を退けておられる。

II 「思はぬ方にとまりする少将」の「中将きみの御めのとたりし人はうせにしか」の「将」の右部分に「の歎」の傍注を施したうえで、欄外に「融按中将君中のきみの誤なるべし 外にも

<p>⑧⑨ たゝそへ侍しぞそ彥文の詞以下脱したりとおほし</p>	<p>うみの水のあら〇いふ二人のわらははべに給へ 風のおとりのさへづりむしのねなみのうちよせしこゑにたゞそへ侍しぞ</p>	<p>六十七ウ</p>
<p>⑧⑩</p>	<p>以下 不詳</p>	<p>六十六ウ</p>
<p>⑧⑪</p>	<p>と脱敷</p>	<p>六十七ウ</p>
<p>⑧⑫</p>	<p>かふちなへにされ とむかたをりにいるなるかなよべにもあれ</p>	<p>六十六ウ</p>
<p>⑧⑬</p>	<p>原ま</p>	<p>六十五ウ</p>
<p>⑧⑭</p>	<p>全</p>	<p>六十五ウ</p>
<p>⑧⑮</p>	<p>みななどや侍 またきなくは</p>	<p>六十五ウ</p>

此誤の例あり」の頭注を施していることについては、「中将きみ」とする本文を有する伝本は、第二門第三類第一種・第二種・第三種・第四種・第五種に限られ、それ以外の現存する諸本の本文が「中のきみ」となっていることや、数行前の本文中で「人々おとろきて中のきみおこしたてまつりて」とあることを根拠として、「中のきみ」の「の(能)」の草体が、字形の近似する「将」の草体に紛れて「中将きみ」という誤った異文が派生したものと想定され、貞融の注釈についてその妥当性を認めておられる。

III 「はなだの女御」の「四の君 中君はちよとおとつねにきくやうをよませつゝいのりかちなめれば」の欄外に「融云父おととの下脱文あるべし もしは父大臣つねに桔梗ときこえてきやうをよませつゝとありしか 善本をまつべし」の頭注を施していることについては、原存する諸本の中で「おとど」の下に脱文を予想させる本文が皆無であることから、当面受け入れ難いとしている。しかし「きくやう」に「桔梗」と「義経」とを懸けた注釈を示したうえで、貞融の注釈(「桔梗」と「経」と

を懸けた修辭法)については、その発想力を堤中納言物語研究史上特筆に値するものと評価しておられる。

IV 「はなだの女御」の「そつ宮の御うへはさまにやにさせ給へる」の「は」に朱書で「の歎」の傍注ならびに墨書で「**花名脱歎**」の傍注を施したうえで、欄外に「融按帥ノ宮の御上は**花名**のさまにやにさせ給へると**花名**のありしを脱落せしなるべし 朱書の字ひがごとなり」の頭注を施していることについては、「はなだの女御」では二十人の女房が登場し、各自の主人二十一人(小命婦君は齋宮を山菅に、帥の宮を芭蕉葉にと重複する)を草花に喩えていることになり、一人一草名が与えられている。帥ノ宮御上には草名が与えられないことになり、不自然さが残ることや、本作品において、女房達が主人に草花の名を命名する際の表現は、旨ね「**人名**は**草花名**」・「**人名**をば**草花名**」の形式をとっていることから、「帥ノ宮の御上は**花名**のさまにやにさせ給へる」とする本文を予想することができるとして、貞融の注釈に一定の評価をあたえつつも、**花名**を脱落する以前の「**花名**のさま」→という異文が伝本に認められないことや、「はなだの女御」での主人を草花に喩える場合の表現形式においては「れいげい殿ははなすゝきとみえ給ふ御さまぞかし」のように敬語を含む「御さま」となっており、貞融が注釈上予測する表現形式は、受け入れ難いものとされている。氏の注釈としては、「ささ(笹)」の「さ(佐)」の草体が、字形の近似する「ま(万)」の草体に紛れて「さま」という異文が派生したものとされている。

右に示した四箇所以外の貞融の書き入れについても注目すべき点^九が認められる。

V 「はなだの女御」の「をみなべしのいみしくをかしくほのか

なりしすゑぞいまいかでたよひにてかたはらんと思に心にくく今一たびゆかしきかをいかならんとおもさだめたる心なくぞありてなかりたらぬさとへなどは」の「す」に「こ」の墨書による傍注が施されている。該当の本文について、松尾聡氏は次のように述べておられる。^九

「すゑ」は底本(筆者注、広島大学浅野侯爵家旧蔵本)「すへ」、神宮本、浜臣本等「すゑ」とある。「末」の意としてこのまゝで解けば、「ほのかな声のなごり」「その奥にあるもの」などの意であるうか。ただし前に「かのをびなへしの御方と言ひし人は声ばかりを聞きし志深く思ひし人なり」とあることから考えて、やはりここは「こゑ(声)」の誤りでもあろうか。

神宮本の「すゑ」の「す」は「春」の草体の仮名で、「古」の草体の仮名「こ」と字形が似ているところがあるから、伝写の誤を推定することも必しも困難ではない。ただ管見に入った伝本の何れにも「す」を「こ」としているものがないから、もとより疑問は残る。

該当の本文については、注釈書等では次のようになっている。

書名	校注者	本文
増訂 堤中納言物語評釈	清水泰	こゑ
新註国文学叢書 堤中納言物語校註	佐伯梅友	こゑ
日本古典文学大系 落窪物語 堤中納言物語	寺本直彦	こゑ
堤中納言物語全註解	山岸徳平	こゑ
堤中納言物語全釈	松尾聡	すゑ (すゑの可能性も)
堤中納言物語の注釈的研究	土岐武治	すゑ

新潮日本 古典集成 堤中納言物語	塚原鉄雄	すゑ
日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語	稲賀敬二	すゑ (こゑの可能性も)

貞融の書き入れによる本文がいくつかの注釈書の本文に採用されている実態が明らかになると、その書き入れの影響力ならびに貞融の本文に対する分析の卓越性が痛感させられるのである。

IV 「はなだの女御」の「それもこのわたりいとちかくぞあなるもし〇り給へる人あらばその人とかきつけ給べし」の「〇」に「し脱敷」の傍注を施したうえに、欄外に「原本もしの下朱にてし敷となるよし也」の頭注を施している。該当の本文について、松尾聡氏は次のように述べておられる。^{注十}

底本・神宮本・体系本など「もし知り」。近くぞあんなるも、しり給へる……。」とよんで「……あんなる(コトヲ)もし知り給へる」の意と解くこともできるが、文章がすつきりしない感じがつよいので、一応「もしり」を「もしり」と誤ったものとみたい。

該当の本文については、注釈書等では次のようになっていいる。該当する本文を「……いと近くぞあんなる。もし知り給へる人あらば」と読解した場合には、「もし」を副詞として認定したことにになり、「いと近くぞあんなるも。知り給へる人あらば」と読解した場合には、「も」を助詞として認定したことになるであろう。後者のように「も」を助詞として認定した場合、各注釈書等では、どのような助詞としていっているものであろうか。それぞれの注釈を見てみよう。(ただし、『新註国文学叢書 堤中納言物語校註』については、口語訳、頭注を施していないため、該当部分の注釈は不明)。

『日本古典文学体系 落窪物語 堤中納言物語』

里の家も、この辺ごく近くにゐるといふ。

書名	本文
増訂 堤中納言物語評釈	……あなるも、知り給へる人、
新註国文学叢書 堤中納言物語校註	……あんなるも、知り給へる人、
日本古典文学大系 落窪物語 堤中納言物語	……あんなるも、知り給へる人、
堤中納言物語全註解	……あなる。もし、知り給へる人、
堤中納言物語全釈	……あんなる。もし知り給へる人、 (……あんなるも、知り給へる人の可能性も)
堤中納言物語の注釈的研究	……あんなるも、しり給へる人、
新潮日本古典集成 堤中納言物語	……あんなるも、知りたまへる人、
日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語	……あんなるも、知りたまへる人、

もしご存知の人があんなら(その家に来るすき者を)誰それと書きつけてください。 『も』 終助詞的用法

『堤中納言物語の注釈的研究』

その女たちの家も、この辺の極く近くにゐるのによつて、御存知の人があんならば、その男は、かういふ人だと書き付けていたよきたい。 『も』 接続助詞的用法

『新潮日本古典集成 堤中納言物語』

女達の集まる里邸もこのあたりでとつても近くであるのだよ。「登場人物が」何某だと書きつけなざるのがよらしい。

『も』 終助詞的用法

『日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』

その女たちの集まる里邸も、すぐこの近所だとかいう話、も

し御存じの人がいたら、これら登場人物は誰それだとその人々がお書き加えになるだろう。

「も」は終助詞的用法
以上のように、その注釈によって「も」は接続助詞的用法、終助詞的用法のものが認められる。「も」を接続助詞と解釈することについては、次のような塚原鉄雄氏の指摘がある。^{註十一}

源流は、終助詞「も」であろうか。

心ひとつにいとど物思はしき添ひて内裏へ参らむと思しつるも、出で立たれず。(源氏物語、橋姫)

などの「も」は、終助詞とも接続助詞とも理解しうる。多分、このような用例が、接続助詞の用法を派生し、定着させたのであろう。ただし、助詞「も」が、接続助詞として完全に定着するのは、中世の鎌倉期以降である。それは、確定の逆態接続を表現する助詞として成立した。

以上のような事情により「も」を接続助詞として解釈することには疑問が残る。

「も」を終助詞として解釈することについては、国語史的な面では否定すべき要素は見あたらないのであるが、係助詞「ぞ」との関係で表現上の疑問が残る。

『梔中納言物語』における「それもこのわたり近くぞあんなるも」の「も」を終助詞と認定するとすれば、本例は、係助詞を含んだ強意用法の「……ソ……モ」という表現形式とみることができ。そのような表現形式を『梔中納言物語』の本文にもとめても本例が一例存するのみである。「ぞ」とともに使用される終助詞はつぎのように「や」が一般的である。

おぼしたるぞあらむや。(虫めづる姫君)

いとぞかしこきや。(同)

けちあんに思はんぞあやしき心なるや。(同)

立ちぬらむことぞあやしきや。(同)

また、本例のように「ぞ」と伝聞・推定の助動詞「なり」ともに使用される場合であっても、

をかしげにぞ侍(る)なる。(花桜折る少将)

中々はじめのをぞし給(ふ)なる。(ほどほどの懸想)

定めたる心なくぞありくなる。(はなだの女御)

ただ今これをぞあやしくをかしをかしといはれ給ふなる。

(同)

終助詞「も」は使われていないのである。

したがって「……あんなるも」の「も」を終助詞として解釈することにおいても疑問が残る。

貞融の注釈のように「も」を「もし」という副詞とすることに於いては、松尾聡氏が指摘されるように、該当する本文を「もしり」とする本文が、伝本中「刈谷二冊本」、「刈谷一冊本」に認められる。^{註十二} 全体的評価としては、このような本文を有する伝本は少数派に属することとなり、その点が本注釈の欠点と考えられる。

四 ま と め

岩下貞融の学的環境を調査するなかで、貞融の学問的特徴の一端を垣間見ることができた。彼の学問的特徴を方向づける意味で、決定的要素となつたのは義門とのそれであろう。義門との学問的交渉のなかで、基礎的、実証的な分野へ関心が向けられたであろうし、そのような研究の態度が培われていったものと思われる。

そのような関心、研究的態度は『梔中納言物語』の校合ならびに注釈の面にも貫かれていたものと推測される。貞融の本文への書き入れの大半は言語に関するもの、本文批判の分野に向けられており、^{註十三} このことによって彼の古典研究への関心がどこにあった

か、彼の研究的態度がどのようなものであったかが裏付けられるのである。

- 注一 「堤中納言物語の研究史的考察―岩下貞融の研究について―」『立命館文学第百八十七号』（昭和三十六年一月・後に「堤中納言物語の研究」に収録）
- 注二 「岩下桜園の古典研究について」（『長野第六十七号』長野郷土史研究会・昭和五十一年五月）
- 注三 「岩下桜園著書解題」（『岩下桜園略年表』（『長野第六十七号』）
- 注四 底本は福井久蔵編『国語学大系第一巻』（厚生閣・昭和十三年四月・一五八頁）による。
- 注五 「岩下貞融の堤中納言物語研究」（『文学第八卷第五号』岩波書店・昭和十五年五月）
- 注六 「堤中納言物語の研究史的考察―岩下貞融の研究について―」（四六頁）
- 注七 「堤中納言物語の研究史的考察―岩下貞融の研究について―」（四六頁）
- 注八 「堤中納言物語の研究史的考察―岩下貞融の研究について―」（四六頁―五一頁）
- 注九 『堤中納言物語全釈』（笠間書院・昭和四十六年一月・二九二頁）

注十 『堤中納言物語全釈』（二九九頁）

注十一 「四も―接続助詞〈現代語〉」（松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社・昭和四十四年四月・三九九頁）

注十二 『堤中納言物語全釈』（二九九頁）

「刈谷二冊本」（表題は「堤中納言物語」上・下とあり、「村上文庫」の蔵書印がある。また「表題二つ竝べ」としたるは岡師樋口芳磨先生の御意見による」とする川合と押印された書き込みがある）

「それも此わたりいとちかくそあんなるもしり給へる人あらはそのひとゝかきつけたまふへし（下三〇ウ）」

「刈谷一冊本」（表題は「堤中納言物語」とあり、頭注は村上忠順自筆による）

「それもこのわたりいとちかくそあんなるもしり給へる人あらはそのひとゝかきつけたまふへし（四七ウ）」

※川合なる人物は、刈谷市立中央図書館の初代館長であることと同図書館の関係者から御教示頂いた。

注十三 「岩下桜園の古典研究について」（七頁）